要旨

日本に在住するブラジル人の日本語学習動機
－母語での生活が可能な環境において－

東京外国語大学大学院
総合国際学研究科　博士前期課程
国際日本専攻　日本語教育リカレントコース

2021 年 7 月 16 日
5320102
内山夕輝

本研究では、これまで研究がなされてこなかった、日本に在住するブラジル人の日本語学習動機について、4 人のブラジル人のライフストーリーによる質的研究を行った。

研究課題は①仕事による時間の制約があり、さらに日本語を使わなくても良い生活環境がある中、日本語を学ぶブラジル人の学習動機を明らかにすること、②彼らの周囲にいる、日本語を学んでいないブラジル人はなぜ学んでいないのか明らかにすること、の 2 点である。これらを明らかにすることにより、日本に暮らすブラジル人の日本社会との関わりについて知ることができ、またその学習動機から、ホスト社会である浜松市がこれまで取り組んできた様々な日本語学習支援施策が適切であったかどうかについて見直す機会につながるのではないかと考えた。

分析には動機づけにおける自己決定理論を構成するミニ理論の「有機統合理論」を用いて、無動機、4 段階の外発的動機づけ、内発的動機づけの計 6 段階に分類した。また、動機づけがどんな要因でなされたか、特に社会文化的要因との関係性について考察を行った。

4 人のこれまでの人生において、日本語学習には様々な動機づけがなされたことが明らかになった。また、それらを引き起こす要因についても明らかにすることができた。共通して見られた動機づけ要因としては、「家族」「良い仕事や生活」「日本(人、文化)に対する好意」があり、またこれらが日本語学習を動機づけることが示された。「家族」要因からは、ブラジル人のライフ・ステージが日本で変化していることが示唆された。「日本(人、文化)に対する好意」は社会的・心理的距離の近さとも考えられ、社会文化的要因が影響していることが示唆された。

また、日本語学習動機が阻害される可能性についても示唆された。阻害要因として、社会文化的要因である「社会階層」「目標言語話者とのネガティブな接触」「民族的アイデンティティ」が影響を与える可能性が示された。仕事が忙しくて日本語を学ぶ時間がないという理由はともすると個人の事情だと捉えられがちだが、インタビューからは間接雇用形態が語られ、これ

により不安定な生活環境にならざるを得ず、学びたくても学べないという状況を生み出していることが明らかとなった。また、インタビューからは、日本語を求められない職場環境の存在が語られた。これらの状況から、社会文化的要因である「社会階層」がブラジル人の日本語学習動機を阻害している可能性が示唆された。「目標言語話者とのネガティブな接触」が日本語学習動機を阻害することも示された。日本語使用に関する望まない配慮を受けたり、嘲笑されたりした実態がインタビューより明らかになった。また、社会文化的要因である「民族的アイデンティティ」が日本語学習動機に影響があることも示唆された。このことから、アイデンティティを支える母語や母文化を否定することなく、現地語である日本語の学習動機を刺激するには何が有効なのか検討する必要があると考えられる。

さらに、ブラジル人コミュニティの中には、日本語学習に対して無動機な状態の人たちがいることが間接的に示された。無動機の要因として、社会文化的要因である「社会階層」「目標言語との接触のなさ」「浜松版言語政策」が挙げられた。「社会階層」や「目標言語との接触のなさ」からは、リーマンショックというビッグインパクトを経てもなお、社会構造に変化が起こらなかったため、日本語学習に動機づけがなされないまま定住化が進む現状が示唆された。インタビューからは、行政のポルトガル語通訳サービスについても言及があった。多文化共生推進施策の一つとして提供されてきたポルトガル語通訳サービス(「浜松版言語政策」)が、場合によっては、ブラジル人にとって日本語学習を動機づけない要因となる可能性が示唆された。

これらの考察から、本研究では、一つの仮説「浜松に在住するブラジル人の中には、日本語を目標言語として捉えていない、つまり日本語を習得するべき言語として目標化していない人がいる」を立てることができた。日本語を目標言語としない集団との共生は、浜松市において、本格的に定住化が進むブラジル人住民との間における新たなステージの始まりなのかもしれない。他の国籍の人たちも同様の可能性が見られるのか。早急に仮説を検証する必要があると考えられる。